

ば氏の人生は親父と共にあり、長い開拓の道程を喜怒哀楽を同じくした盟友との別れには豪気な氏の目にも光るものが溢れた。深く哀悼の意を述べたい。

思えば風雪五十年、当時若かった開拓の戦士も今は孫を抱き、老妻をいたわりながら、若き日の心のアルバムを追想する老境に入った。

私も朋友梅津利美氏夫妻の懇情に浴し、愚妻賢妻どちらとも言える妻と「共に白髪の生えるまで」を辿り、子供三人、孫八人の当節大家族に囲まれ、恥多き人生を省みず、ただ漫然として幸に浴している。そんな我が身を思う時、志し半ば

大八洲開拓命名の由来

昭和十五年四月、生れ故郷から満洲に渡り大八洲にお世話になったのが十八歳の少年の頃であったから、振り返れば長い開拓の道のりである。

大八洲開拓団は西弥栄開拓とともに第一次開拓弥栄村の分村として計画を進めて、正式な認可のないまま村の南方に入植したので、その頃は南弥栄農園と呼んでいた。それから一時、第二次開拓千振郷の分村として、近くに入植した開拓団と合併して日高見開拓団と呼んだこともあった。

しかし、わずかな間で大八洲開拓は分離して日高見とも

にして逝った同志諸氏への哀惜の念を伝え、また、この幸の基礎作りに並々ならぬ御尽力をいただいた有志の鬼籍の人となられた多くの方々に改めて感謝の意を申し上げたい。

今組合を取り巻く社会情勢は大きく激変し、農業を基幹とする組合は波状的に試練が襲っているが、それに応え二世、三世の世代が怯むことなく石田組合長を陣頭に対処に専念している。それを見守り励ますように「偕に拓き共に築く」開拓碑を傍らに親父は慈愛のまなざしで立っている。

人生五十年を回顧しながら大八洲開拓の弥栄を祈る。

伊藤 喜代志

に第十三次集合開拓団として認可されることになった。

その時のことであった。佐藤団長と私達数名の若い者が馬車に乗って作業に向かう途中、団長が「一寸君達に話がある。うちの開拓もいよいよ団名を付けなければならないのだが、君達に何か名案がないか。あるなら遠慮なくいってくれ」と申された。

その途端に誰先となく一斉に“希望は躍る大八洲”と繰り返し歌ったので、団長に「冗談は抜きにして真面目な話だ」と言われても、さらに一声高く皆が揃って“希望は躍る大八洲”

と幾度となく叫び続けたので、さすがの団長も最後は苦笑しながら「わかった。それまで君達が希望ならば大八洲と名付けよう」と言って命名して、大八洲開拓団が誕生したのが“大八洲”名称の由来であり、懐かしく当時がい出される。

この大八洲は、戦時中国内で愛唱した“身よ東海の空明け”からはじまる愛国行進曲のひとつだりにあることは皆も知ってのように、希望を抱いて大陸開拓に乗り出した我々若者は常々この曲に意気を感じていたので、透かさず発した文句であった。

その時居合わせた拓友は戦死などで既になく、自分一人生き残っているが、五年と短く終わった大陸開拓を日本で再起を誓ってから五十年、今は二世に託し余生を送る身となった。

そして、六十年近い歩みを顧みて、自分一人でここまで歩むことができたかと反省する時、誰もが思うのは開拓の父“親父様”と言って親しく信頼を寄せてきた佐藤初代組合長の貢献による賜である。

誰によらず公平に温かく接し、私利私欲は微塵もない卓越

大八洲二世としての思い出

両親が山形から守谷町に入植したのは、戦後まだ浅い昭和二十三年でした。私の子供の頃の思い出は共同生活で、食料

した開拓指導者に巡り会えた私は実に幸福であったと心から感謝している。さらに、その佐藤組合長の遺志を継ぎ、亡き後の組合を守ってきた代々の組合長をはじめ同志ならびに二世代の組合員の努力と協力により安心して日常の暮しができていることに對し本当にありがとうと申し上げたい。

中国政府の厚意により二回にわたり現地を訪れ、終戦後の避難途上亡くなった皆さんならびに我が一族の墓参を達成し、兄弟の四男坊として一人生き残った私が、兄貴達の代役としてその努めを果たし得たとやっと長年の胸の思いを撫で下ろすことができた。

流浪避難の当時のお母さん方、歩いた道も幾百里、乳幼児を背負い子供の手を取り、老人の面倒を見ながら、夜は野宿の皆さんが亡くなった道を辿り、只々胸が熱くなるばかり、言葉にならず、母は強しの一言でした。それから五十年余り、今はおばあちゃん達よ、これからの余生も何時までも強く愉快に送って、迎える五十周年祭には今は亡き同志の面影をグラスに浮かべ大いに祝い、故人を偲ぼうではないか。

梅津康則

不足など現在では考えられないような生活でした。

小学生に入学する頃は個人生活になったとのことでした。